

— 新しき箒と、忘れものの王 —

黎明のころ、律の巫女は三本の箒を抱えて歩いていた。

一本は柄の長い箒、高みを払う理性の象徴。

一本は穂先の長い箒、隅々に届く感情の象徴。

そして三本目は、使い古されほつれた箒、経験の象徴だった。

それらを新しいものに換えるため、

巫女は学び舎の校門——すなわち心の玄関へ向かう。

門の前には石の段差があり、

その下には、深く澄んだ水が溜まっていた。

一步でも踏み込めば、深見にはまる。

巫女はその手前で立ち止まり、風のを聞いた。

「ここは、意識と無意識の境。

深みに触れずに越えようとする者は、

いつか自らの影を見失う。」

巫女は足を止め、方向を変えた。

倉庫——無意識の奥に戻ろうとしたのだ。

だが振り返ると、そこもまた一面の水。

どうやってここまで来たのか、わからないほどに、

道全体が鏡のように光を映していた。

浅い場所を探しても見つからない。

水は踵まで覆い、逃げ道はなかった。

巫女は覚悟を決め、

その水の中を歩きはじめた。

けれど、不思議なことに靴は濡れなかった。

水は彼女を拒まず、穏やかに受け入れていた。

「恐れを越えよ、恐れに沈むな。」

水の声がそう告げていた。

倉庫に辿り着くと、闇の奥で風が生まれ、
三本の古い箒が光の粒に包まれた。
倉庫の精が言った。
「理性、感情、経験——それぞれの役割を終えた。
いま三つは融けあい、一つの新しき道具となる。」

光が収まり、巫女の手には一本の箒が残った。
しなやかで軽く、手に馴染む。
外を掃くだけでなく、心を整える力を宿していた。

その後、巫女は仲間とともに白いバスに乗った。
バスは、運命を運ぶ船のようだった。
途中、運転手が急に顔を上げて言った。
「忘れものをした。」
彼はバスを止め、一台の自転車にまたがり、
風を切って戻っていった。
巫女はその背を見送りながら思った。
「彼は何を取り戻しに行くのだろう。」
やがて風の精が囁いた。
「それは“食べ物”——魂の糧だ。
彼は、あなたの内で渴いていた“生きる力”を探しに行ったのだ。」

外に出ると、道の傍らに建物があつた。
閉じられた結社のような事務所。
人々は互いに顔を見知り、合言葉を交わして出入りしている。
扉の奥は温かそうだが、
外から来た者には重く閉ざされていた。
巫女は扉に手をかけかけて、静かに止まった。
「ここは他者の律に守られた場。
私はいま、自らの律に従わねばならない。」

風が頬を撫で、空の光が水面に揺れた。
倉庫の精の声が再び響いた。
「忘れものの王が探しに行った食べ物は、

あなたがかつて置き去りにした“原初の優しさ”の果実だ。
それが戻るとき、あなたの箒は完全となる。」

巫女は新しい箒を掲げた。
穂先には、三本の古き箒の光が宿っていた。

水はなお満ち、靴は濡れず、
扉の向こうでは風が渡っていた。
巫女は静かに歩き出した。
心を掃くために。
そして、魂を養うために。